

ドクニンジン

概要

和名（科名）	ドクニンジン（セリ科）
英名	Poison-Hemlock
特徴	<p>葉は、2～3 回羽状に分裂し、葉柄の根元にひれがついている。夏には小さな白花を複合散形（傘が開いたような形）につける。茎高 70～180cm になる二年草である。全体に光沢があり、紫紅色の斑点が植物全体にみられる。臭いは重い不快臭がある。花後、長さ 3 mm 前後の楕円形の果実を結ぶ。果実に毒成分が多い。</p> <p>ドクゼリに対比すべき有毒植物で全草有毒。山菜として利用されるシャク（セリ科）は山地の陰地に多く自生する多年草で、これと間違っただの中毒が、札幌市において報告されている。シャクは野菜の人参のような香りがあることで区別できる。</p>
有毒成分	アルカロイド（コニイン）
分布	ヨーロッパ原産の植物であるが、全国的に帰化植物として雑草化が報告され、分布域が広がっている。

毒性

部位	種子を含む全草
毒性	強毒
食用の可否	×

（写真）



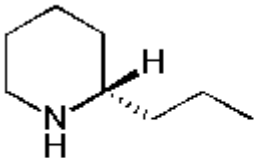
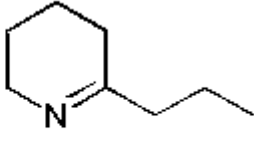
ドクニンジン

詳細

1 特徴

一般名	ドクニンジン
英名	hemlock, poison-hemlock
学名	<i>Conium maculatum</i> L.
分類	セリ目 <i>Apiales</i> 、セリ科 <i>Apiaceae</i> 、ドクニンジン属 <i>Conium</i>
生育地	ヨーロッパ原産。中国、北アフリカ、北アメリカに帰化し、日本では全国的に拡大しつつある。北海道では、札幌市近郊の土砂捨場、または隣接する牧草地への進入が見られる。
形態	<p>草丈 70～180 cm になる二年草。根は円錐形で肥厚する。茎は中空で太く、上部は分枝して広がる。葉は 2～3 回羽状複葉。小葉は卵状皮針形、長さ 1～3 cm、さらに深裂する。茎、葉柄に紫紅色の斑点があり、植物全体に光沢がある。</p> <p>花期は 7～9 月。大形の復散形花序に白色五弁の約 3 mm の小花をつけ、花の先端は内に曲がり、その中の 1 枚だけが大きい。</p> <p>果実はほぼ球形で、直径は約 3.5 mm、熟すると 2 分果に分かれる。</p> <div>    </div> <div>    </div>

2 毒性成分情報

毒性成分	<p>coniine、γ-coniceine などのアルカロイド</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>coniine</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>γ-coniceine</p> </div> </div>
中毒症状	全草、果実に有毒成分を含み、食べると悪心、嘔吐、流涎、昏睡を起こす。
発病時期	30～40 分
発生事例	(症例) 1997 年 4 月札幌市内において、山菜のシャク (山ニンジン) <i>Anthriscus sylvestris</i> (L.) Hoffm. と間違えて、ドクニンジンの若芽を茹でてお浸しにして食し、中毒した。
中毒対策	ドクニンジンの分布が広がっていくと、山菜のシャクの生育地と競合する可能性が生じる。

3 その他の参考になる情報

その他	<p>古代ギリシャでは、このエキスを罪人処刑 (毒殺) に用いていた。哲学者ソクラテスが、この毒によって最期を遂げたことは有名。</p> <p>北アフリカ原産の同属のドクパセリ <i>C. chaerophylloides</i> (Thunb.) Sond. も含めてドクニンジンと総称することもある。</p>
間違いやすい植物	山菜として食用になるシャク (コシャク) に似ているため誤食の可能性もあるが、植物全体に不快な臭気があり、紫紅色の斑点で識別できる。